



|                     |                                                                                                         |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 有島武郎の研究〔論文内容及び審査の要旨〕                                                                                    |
| Author(s)           | 中村, 建                                                                                                   |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                   |
| Degree Name         | 博士(文学)                                                                                                  |
| Dissertation Number | 甲第15981号                                                                                                |
| Issue Date          | 2024-03-25                                                                                              |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/92257">https://hdl.handle.net/2115/92257</a>                       |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                         |
| File Information    | Takeru_Nakamura_review.pdf, 審査の要旨                                                                       |



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）          氏名：    中   村          建

主査 教 授 中 村 三 春  
審査委員 副査 教 授 水 溜 真由美  
副査 准教授 蔦          清 行

## 学位論文題名

有 島 武 郎 の 研 究

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

大正時代を代表する『白樺』派の作家有島武郎は、ホイットマン、ベルクソン、トルストイらの影響の下、評論『惜みなく愛は奪ふ』の題名に示されるように、人間の根源的な生命力を「愛」と呼び、またその作品においてもしばしば恋愛を重要なモチーフとして描き出した。従来の有島研究においても恋愛の要素は問題とされてきたが、その多くは、日本近代文学の研究全般の通弊として、作家と作品の問題を混同する傾向が強かった。本論文はこの傾向を批判し、第一に、文献調査をつぶさに行き、大正時代に流行した厨川白村や土田杏村らによる恋愛論を通観し、有島による恋愛論をその中に位置づけ、第二に有島自身の恋愛論をその多くの評論から「恋愛の多角性」に焦点を絞って集約し、第三にその概念を鍵として多数の作品を精緻に読み解いて有島の文芸様式の再評価を行った。これらの成果は有島研究において新規の地歩を築くものである。

具体的には、第一に、有島の小説作品としては、『或る女』『宣言』『迷路』『星座』など、従来も恋愛の観点から論じられている主要な長編を根底から再検討し、また、あまり取り上げられない短編「凱旋」を、この観点から重要作品として初めて正面から問題とした。第二に、「死と其前後」「ドモ又の死」「断橋」など、通常は副次的にのみ論及される戯曲作品を本格的に研究対象として、小説と統合的に論じた。第三に、それらの論述の過程において、マーテルリンクの戯曲と『宣言』『死と其前後』、トウェインの小説と「ドモ又の死」、ド・フリースの突然変異説と『宣言』など、海外の文芸や思想の受容と独自の展開の跡を検証し、比較文学的な論点から解釈の精緻化を行い、さらに近松門左衛門の浄瑠璃と「ドモ又の死」など、日本古典との繋がりについても併せて検討した。第四に、『或る女』における海からの声など幻想的なイメージの追究、「凱旋」における多元的焦点化などナラトロジーの観点、『迷路』『星座』における身体論的な論点、さらに「断橋」における自作品『或る女』と国木田独歩の諸作品からのアダプテーションの側面など、現代における様々な文芸研究の理論を駆使して、この課題を追究したのである。

これらのことが一定の説得力を伴って詳細に究明されていることから、本論文は有島武郎研究の領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

### ・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、先行する有島研究における問題点を整理し、同時代の恋愛論における有島の言説の位置を「恋愛の多角性」の独自性において見定め、それを前提として主要な長編小説と特異な短編小

説、さらに主な戯曲群を対象として、綿密な作品分析と解釈に基づき、思想史、語り論、比較文学、古典との繋がり、アダプテーション論などの理論を援用して、横断的かつ総合的に検討を加えた。その結果として本論文は、作品における恋愛の不随意性と人物間におけるコミュニケーションの透明と障害、あるいは接続と断絶の様相を明らかにし、「恋愛の多角性」が決してユートピア的解決に向かわず、人間的な苦悩を描き出す表現構造を抽出した。それらの表現は、調和的な解決に物語が収斂せず、小説における多元的焦点化や、戯曲における「恋愛の多角性」に起因するノイズの介在によって、有島の文芸様式を意義あらしめるものとして適切に評価されている。これらのことから、本審査委員会は、本論文を高い研究水準にあるものとして判断した。本論文によって、有島文学における恋愛の問題について、従来より高次元の認識が新たに行われたものと認められる。

ただし、意欲的な研究であることから、それに付随する幾つかの問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) 当時の恋愛言説のみならず、恋愛と結婚をめぐる社会的な状況と有島のテキストとの関係に対する視点が比較的希薄な点、(2) 有島のいう「内なる自然」を「観念的な自然」と規定して前提とした結果、その限界性の導出がやや性急となった点、(3) 「恋愛の多角性」と多元的焦点化との関係など、思想と表現との関係についての配慮に不足が見られる点、(4) 作品分析における先行研究の適用や、突然変異説と作品との繋がり of 解明などの論述展開について、若干の甘さが見られる点などである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文全体の高い研究水準と論及の達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も有島および日本近代文学に関する研究を持続し、論述手法をさらに洗練することによって解決の期待できる課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。